

第55号 華山会報

令和7年11月11日

公益財団法人華山会

郷土の偉人渡辺華山

公益財団法人華山会 理事長 林 勇 夫



華山会は、田原が誇る偉人渡辺華山先生の精神を現代に伝え、業績を顕彰し、地域文化と教育の振興に寄与することを目的に、長年にわたり活動が続けてまいりました。

華山先生は、寛政五年（一七九三）に田原藩の江戸藩邸に生まれ、幼いころの経験により志を立て、画家として卓越した才能を示すとともに、政治家・思想家としても時代に大きな足跡を残しました。とくに江戸末期には、田原藩士として藩政改革に尽力し、農政の改善や領民の生活向上を第一に考

えました。また洋学を学び世界に目を向け、鎖国の世にありながら海外事情を研究し、日本の将来を見据えた行動は、幕末の先覚者でもありました。このような藩政改革や民政への取り組みは、今という公共のための奉仕精神に通じるものです。

この華山会報は、平成十年に創刊されて以来、華山先生のご思想と功績を現代に伝えるとともに、本会の活動報告や華山研究者や崇敬者の方々の交流の場として、年二回発行してまいりました。また専門家の方々に寄稿を頂き、華山・史学研究会の皆さんの研究成果や地域文化の紹介を通して、華山先生の志を未来に繋げるものと考えております。

その華山先生の言葉に、『田原ハ武ヲ構シ徳ヲ敷キ 天地の間ニ独立致 掌大の地ヲ百世ニ存候様 御工夫第一也 何テモ徳ニ無之テハ危シ』という一節があります。これは、田原藩は武士としての心構えを持ち、徳をもって藩政を行い、小さいながらも後々の代まで藩として存続できるよう、まず工夫をすることが大切である。徳がなければ藩の存続は危ういという意味です。社会が大きく変化する今だからこそ、華山先生のこの言葉は現代にも通じるもので、その先見性や行動力、そして人に対する深いまなざしが、あらためて見直されるべき時代に来ているのではないかと感じます。

華山会としてもその理念を基に、時代に即した活動を模索し、昨年、田原から未来を拓く志の高いリーダーを育成する華山塾を開講いたしました。華山先生の精神を次の若い世代へ伝えていけたらと願っております。

今後とも、顕彰活動に一層努めて参りますので、皆様方の格別のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

田原ハ武ヲ構シ徳ヲ敷キ
天地の間ニ独立致 掌大の
地ヲ百世ニ存候様 御工夫
第一也 何テモ徳ニ無之テハ
危シ

天保9年（1838）田原御三人様宛
書簡「阿蘭陀風説書」より

田原藩義倉・報民倉

―民に報いたいと願った大名と華山⑤―

研究会員 石川洋一

三、報民倉の披露と救恤

○康直公の田原着城と報民倉の披露

天保六年九月に報民倉の建設が始められ、同年十一月末には工事はほぼ完了し、貯穀米も倉に搬入された。翌七年四月十九日には、年寄、用人ほかすべての役人で報民倉の出来栄え見分を済ませ、六月二十五日に報民倉惣掛りを金田丈左エ門、大嶋祐左衛門に命じている。天保七年七月十四日に藩主三宅康直が江戸より帰城する。天保七年七月二十一日、それを待って報民倉の披露が行われた。

七月廿一日(史料は天保七年『御用方日記』読み下し文以下同じ)
一、藩主康直は雨天のためしばらく見合わせ、午前十時頃、お供揃いで報民倉をご覧になった。お供は、御用人市川茂右衛門、御取次杉山長左衛門、御納戸木下半外、御近習村上国助、

佐野麻吉、永田千吉、川澄肇、御医師鈴木愚伯、御茶弁当、御次番岡本久太夫、御草り取兩人(内老入御長柄傘)、茂右衛門草り取で惣供であった。

康直公は手代の案内で入らせられた。供の者の衣服は、羽織袴であり、雨天のため下駄もゆるされた。御門からは、下目付が康直公の案内を勤めた。御蔵を御覧になって、すべての役人を御目通りに呼び出し、何れも骨折ってくれた、出来栄えには満足していると告げ、さらに、窮民を救うための倉だから、飢饉の非常時以外、決して他の入用に流用してはいけなと命じている。

報民倉設立は藩にとって一大イベントであったと思われる。七月二十三日には次の記事がある。

一、家中一統へ今日、明日、明後日朝八時から報民倉を見学するようにと仰せつける。部屋住の者、幼年の者も、手伝いに立た者は、見に来なさい。親類などを通じて組下の者へも漏らさないように伝えなさいと各席へ通達を出した。

さらにこのあと、田原の町の富裕

町人が呼び出されている。七月二十五日には、御用達を藩庁に召しだし、報民倉掛りを命じている。

一、御用部屋に御用人が列座し、御目付が立ち会い、村奉行、元メも詰め、板倉安右エ門同道。お勝手向き兼々出精し相勤め、かつ、この度、御報民倉の御用掛り仰せつけられ候に付、それより名字相名乗り、御印付相用い申すべく候。

拝領 上下

広中六太夫

拝領 上下

鈴木甚十郎(後略)

この後、町庄右衛門、濱田村弥八郎、安原新田元メ佐平、仁崎村伝七も同じように呼び出されている。彼らはそれぞれ御用達頭取、御用達に仰せ付けられ、勝手向きのことで、先の広中六太夫や鈴木甚十郎を支え、相談し勤めに精を出せと要請されている。広中六太夫や鈴木甚十郎に報民倉掛を命じ、飢饉に備えての備蓄米や火急時の救出米について心得ておけ、外の四人も六太夫らに力を貸せといっている。ここで初めて富裕町人が報民倉の運用に関与す

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 郷土の偉人渡辺華山

林 勇夫

P ② 田原藩義倉・報民倉⑤

石川洋一

P ⑥ 『幽居記聞』と

『守困日歴』(二)

別所興一

P ⑩ 『刀祢河游記』

序論 中神昌秀

P ⑫ 「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

P ⑬ 公益財団法人華山会

田原市博物館からご案内

る。既に藩では、金田丈左エ門・大嶋祐左衛門が報民倉総掛りに任命されている。これで藩側と民間の役職者が決まった。

○褒詞

藩主康直を迎えて報民倉の披露、さらに、富裕町人広中六太夫、鈴木甚十郎に報民倉御用を仰せつけたあと、その設立労苦に対する褒詞褒賞・酒宴の席を八月二日と三日に設けた。年寄佐藤半助・鈴木弥太夫・川澄又次郎、用人市川茂右衛門・八木八右衛門の五人と物頭雪吹伊織が格別に出精し、上米をしたということに紋付きの盃一箱が与えられた。次に褒詞褒賞を授けられたのは「別段」として小頭三人、足輕二十人、江戸詰帰りの足輕五人である。さらに十三の寺院山伏など宗教関係者、徒士小役人が続く。献米をした武士もこの間に褒詞褒賞を受けているが、竹木寄進や勤労奉仕はしたが献米をしなかった多くの武士は「御褒詞」のお褒めの言葉だけだった。慰労の酒宴は、役職者、士分の者、お目見え部屋住、徒士、小役人、足輕、中間小頭、譜代中間、士分子供、足輕子供、徒士幼年など身分職域年齢別に

行われた。

○天保の飢饉

報民倉の披露や設立の労苦に報いる褒詞褒賞を終えた十日後の八月十三日渥美半島は大風雨と高潮に襲われた。『御用方日記』八月十三・四日条には村上孫兵衛はじめ士分十五人から屋根が吹き放れ、座敷が潰れ、壁が大破し住居できないと憐愍を願う届が出されている。「大飢饉末世為人記」（仲神家文書）『赤羽根の古文書』六九三頁に次のようにある。

八月十三日ばんかたより大風というにもかぎりなき大風、尤其夜七ツ時までには風はおだやかに相成候、はそんなというは、家々むねのとれぬ内なし、古家方々ころび立木夥しくころび御領内ころび木ハ数しれず名ある大木沢山にころび候、なすなどハそれざりにかれ、そばハとこよき物ハたねをとり、ところあしき者ハたねもなく、大こんハ少々ツ、とれ是も冬中の汁のみくらの事也、・・・（中略）・・・当年のききんは二百何十年以前二有之候通り之大きき人と人々申咄シ御座候、

田畑の被害も中神甚四郎の記録から、甚大であると思われる。九月十四日から十九日まで作柄見分した村奉行大嶋祐左衛門は、

今年は稲の生育もよろしく見えしたが、早稲も風あたりのため痛み、浦郷は汐あたりなどで実りのない穂が多い。晩稲も同様である。（中略）参加した者で話し合い、まずは「下々」と評価した。（『御用方日記』九月二十日条）

と言上している。評定は古代律令時代からの上中下の三文字のうち二文字を組み合わせた十二段階の評定と思われるが、下々は最低評価である。その後、天候は回復し、稲作も持ち直したようだが、免極めでは「田方壹分五厘下り免、無抛所ニより式分下免」（『御用方日記』十一月十二日条）とあり、大凶作であったと思われる。

○康直の窮民視察と飢饉対策

この未曾有の凶作を前に、対策に動いたのは藩主康直である。十一月十五日、十二月三日、同月二十一日と村々の窮状を視察にいつている。漆田村、青津村、赤松村、濱田村、

水川村を訪ね一軒一軒納戸の者を中に入れ暮らしの様子を尋ねている。

藩主康直は江戸の渡辺崋山を国元に呼び寄せ、凶荒対策に当たらせようとしたが、あいにく崋山は病床にあつて、田原へ赴くことはできず、代わりに救恤のための方策を練り、凶慌施策の書として、救荒諸役任命案である「凶慌取計之事」、藩主名による家中への諭告文である「申渡」領内触文である「領中の者へ申渡」を、ほかに心得書も含めて田原へ送った。

○救恤の実態

赤羽根村庄屋鈴木三十郎家に伝わる「御触面」には大凶作となった天保七年（一八三六）の十二月二十六日の回状がある。村奉行・代官よりの回状で、庄屋の手により書写されて村送りにされたものである。「奉行様」「代官様」の敬称は、おそらく庄屋三十郎が書き加えたのだらう。

困民救済御回状申し達し候、しからば町在困民の者、男女限らず、万一大病の節、粥米手当てとして、報民倉御囲米の内より左の通り割り付け、役人どもまで

御下げ米仰せ出され候間、頂戴、来る二十八日九ツ時過ぎ、村役人持人足召し連れ、報民倉までまかり出でもうすべく候、かつ申すまでもこれなく候えども、万一大病人これあり候えば、組合親類は勿論、役人ども朝暮念入り、(この後の記述がない)十二月二十六日 御奉行様

代官様

一、米壺俵

赤羽根中村

村々庄屋

『赤羽根の古文書 近世史料編』四二三頁読み下し文以下同じ)

生活に困窮している人たちの中で大病の節、粥米の手当にと一俵下げ米として村々に下されたが、この米は報民倉囲米の内から出ている。また、大病人があるときには組合や親類はもちろん朝晩念を入れて気をつけるよう働きかけている。翌年二月三日には次の廻状が出されている。

御回状をもって申し触れ候、しからばその村々より書き出し候困窮の者へ、これより来る四月二十日まで、追って一人前に一日一合の割合をもって、日数

十日分宛、米麦稗取り受け、拝借仰せ付けられ候間、来る六日報民倉へ請取のため、銘々はした穀入れ候かます(呎)、あるいは袋様の物、三つに用意、人足召し遣しまかり出るべく候、もつとも拝借穀の事に候えば、二割之利足相掛り候間、村方にて如何様にも借り入出来間に合

い候者はすべて拝借に及ばず候、自力に出来かね候者ばかり申し出るべく候

一、拝借穀受け取り通いとして小帳一冊づつ持参もうすべく候、右の段その意得べく候、已上、

二月三日

日高三左衛門 塩谷武左衛門

稲熊補助

村々庄屋ども

(前出『赤羽根の古文書 近世史料編』四二四頁)

村々より書き出した困窮の者へ、四月二十日まで一人に一日一合の割合をもって、米・麦・稗を十日分ずつ貸し付けるといふ。また、報民倉で穀物を借りた時の利息は二割と記されている。さらに、報民倉に貯穀

していたのは米だけでなく麦・稗も含めた穀物であることがわかる。日高三左衛門・塩谷武左衛門・稲熊補助は代官である。

廻状もって申し触れ候、村々拝借穀来る二十日五ツ時より、なお又日数五日分御渡し仰せ付られ候間、例の通り相心得、通持参まかり出でもうさるべく候、以上、

四月十七日 両手永手附手代

加治村より和地村まで

村々庄屋中

(前出『赤羽根の古文書 近世史料編』四三二頁)

加治村から和地村迄の広範囲の村々宛であることから、穀物を借り受けるのは村々の郷蔵からではなく報民倉からであろう。報民倉からの穀物の貸出の記事は、四月十七日で途絶える。四月二十日条に「今日報民倉仕舞(終い)御蔵出につき」とあり、すでに四月十七日の「日数五日分」救援米蔵出しで貯穀米が枯渴したことが推察されるが、報民倉が天保七年(一八三六)に大凶作に苦しむ領民の一助になったことは確かである。天保八年(一八三七)は、

春麦が豊作で人々の暮らしは一息ついたといわれるが、「領中の者へ申渡」から、すでに報民倉など藩の備蓄米だけでは、窮民の救恤に不足することを予見していたと思われる。「父母兄弟は勿論親類・縁者等に厚き善事を尽しとり続候もの、又は人の危難を救施をいたし候もの」は、「天道に叶ひ候善人にて、誠に能く我等の志を汲み分け候ものにて、これ又領中之ものの兄とも申すべく候間、格別に賞美遣わすべし」と民間の共助を期待していた。

次のように賞美された新田元締の書付(極楽新田元締渥美善四郎「天保四癸巳年ヨリ日鑑」)がある。

一、丁酉春、村困窮者へ錢・小麦・飴・粕代にメ金四両三分と七十文、救い遣わしもうし候ところ、右御上へ書き上げ候ところ、三月二十八日御弥美の上、御書物下され候、(中略)未だ御領主様御若手に候えども、御慈悲の深き事は遠近に聞かず候也。

一、又々丁酉八月二十八日新において、二ッ組御盃の御目録ならびに報符板御書付、これは右

施候品々代メ也、熨斗は下され候（中略）

一、このたび困窮者の内七十歳已上の老人へ鳥目二十疋づつ下され候、当春は御直に在々御順見遊させられ、格別貧家へは御立入等遊され候事也、源左衛門父・与次右衛門祖母・吉右衛門母・市左衛門・勘十郎祖母、メ五人へメ錢一貫文頂戴仕り候、

天保八年（一八三七）春、極楽新田元締渥美善四郎は村内の困窮者へ、小麦・飴・粕代として金四両三分と七十文を救いのため遣わした。それを藩へ書き上げたところ、三月二十八日に褒美の書物、八月二十八日に二つ組盃の目録と報符板を受けた。報符板というのは、奇特な行いをしたということを表す板である。真木重郎兵衛が江戸から携えていった救荒対策指示の書付のなかに「奇特の者称誉いたすべく候事、その村へ立札、御城下へ立札、これは橋詰捨て札差し置き候ところと違ひ候事」や「旌標の事」など、民間人に称誉を与えて救恤に当たらせようとする意図がある。

また、この史料からも田原藩の救

恤策や藩主康直の動きがわかる。藩から困窮者のうち七十歳以上の者に一人鳥目二十疋ずつ援助があった。極楽新田では五人に渡され、合計一貫文いただいた。藩主康直は直々に村々を順見し、「格別貧家へは御立入等遊され候事也」と、新田元締という村役人層には殿様の動きが伝聞として伝わっている。『御用人方日記』には藩主が格別の貧家に直接入ったという記事はないが、事実としたら注目される。また「極老病人、寡婦、一人暮らしなどの者には格別の施しをする」ことが実際村々で行われ、弱者へ手を差し伸べようとする社会政策的な藩政が村役人の手を経て行われていることがわかる。

おわりに

義倉の名前の由来になり、直書や領民への布告に用いられた「民に報いる」という表現は、衝撃的な言葉として田原藩家中や領民に迎えられたと思われる。通常大名や家中の武士にとって、何か報いるべき対象を問われれば、戦国乱世の世を戦い抜き大名やその臣下として取立てられ

た先祖の功績をあげるであろう。江戸後期、迷信や呪いから離れて自ら考え工夫する人々が多くなったいるが、まだ士農工商の身分制度は堅実に存在していた。律義に年貢を納める農民を評価することはあっても、下々の農民に敬意を払うという風潮は乏しい。

「民に報いる」「報民」という理念は、渡辺崋山の師佐藤一斎の考え「平日民に養はるるの恩を凶飢の時に報ゆべきなり」（『済廩略記』）に基づいていると思われるが、崋山はさらに深く掘り下げ具体的にその理念のもと報民倉設立に動いた。理性的に現実を見、儒教的な博愛や平等の観点から年貢の外に領民に備荒貯穀を強いるのはよくないと、藩の作る義倉の最初の義倉元米は藩からの米と家中の献米でまかされた。十八世紀以降藩の設ける義倉であっても藩からの米と民間からの米とが半々であるのが義倉元米の通常であった。ここに報民倉の特色がある。

さらに、田原藩は、家中に対しても為政者の一員であるとの認識から諸藩の例にない、藩主の趣向に従え、と凶飢に備える任務に私的にも務め

よと号令を発す。これも佐藤一斎の「よろしく人主（藩主）の意を体し、自らその衣食を減じ、斗升の微をつみて人主を助け、平日民に養はるるの恩を凶飢の時に報ゆべきなり」（『済廩略記』）から来ていると思われる。これは「私領主は民の父母、その方（家中）どもは民の兄」（崋山筆による「直書」大意）と家臣団を為政者にとらえた斬新な見解でもある。

報民倉の設立は、藩主康直の奏者番就任の大望のために善政が敷かれ行き渡っている田原藩を喧伝するための意図的な方策という見方もあるが、まさに田原での天保の飢饉が発生した時、窮民の救恤に役立った。家中の武士も上下一律二人扶持という厳しい家計の中で、藩主の意趣によく協力して務めたといえる。

特に年寄・用人は、石取・石運び作業では、連日自ら山に入り、作業の指揮をし、足軽など軽輩の者とも同じ空間で慰労の酒を酌み交し、石運びの荷車を前髪髪の子どもたちと曳いたりして延四千五百余人々を動かす大きなうねりの原動力となった。

『幽居記聞』と『守困日歴』(二)

田原蟄居中の華山の覚書と日記

研究会員 別所興一

I 『守困日歴』の成り立ち

『守困日歴』は旧版の『華山全集』第一巻(華山会刊、一九一〇年)にも

も納められているが、脱落や誤読の箇所が多いので、筆者は田原市博物館の原本を小澤耕一先生の助言指導で正確に翻刻したものを、『渡辺華山集』第二巻(日本図書センター刊、一九九九年)に収録した。

『守困日歴』の原本は、和紙三六枚を袋綴じにし、表紙は「守困日歴 天保庚子七月」と書いてある。書名の守困の由来については、同年(一八四〇)五月二九日付けの画弟椿椿山宛の書簡で「『易教』の『屯』に居し、困に処す法を学ぶことは、限りなく味わい深いものです。しかも往来する人影はまったく見られず、閑中日月長しVの趣もあり、自己を磨き鍛錬する境遇としては最高の場所と

追われ閑な日がなく、鬱々としてきたのと比較すれば、良友や珍しい物のないことだけが残念とはいえ、この大いなる閑静を得たことはこの上なく大きな幸せです」と書いている。それ故、不自由な蟄居生活にあってもめげないで、心新たに再出発する心意気を示す日記を書こうとしたのではなからうか。

華山は獄舎でかかった皮膚病がひどく、長く床に伏せたままであったが、ようやく一人で立ち上がれる段階になって、画作とともに覚書や日記を書く心境になったようである。

前掲の『幽居記聞』は、同年七月一日に書き留めた覚書であるが、『守困日歴』は同年七月一日から同年十二月二八日までの一七〇日余の日記である。しかし、記録されているのはわずかに四一日のみである。

次に筆者の観点から特筆

に値すると思われる日記の記事を項目別に抜き出して紹介し、若干の注釈を添えさせていただく。

II 画作と書画鑑定などの記事

七月朔一日

一、画「青緑山水、鷗鷺捉魚、二幀」、鈴木春山持去。

この日に描いた「青緑山水」については不明であるが、「鷗鷺捉魚」は豊橋美術館で展示した際の図録に掲載されている。鮎を飲み下そうとする鷗を、柳の梢からカワセミが見下ろすという構図で、井蛙管見

に囚われた徳川日本を隠喩しているようにも受け取れる。青年期に感化を受けた清朝の画家・沈南蘋の画風

を發展させ、上下のコントラストを際立たせた華山独自の画境が表現されている。図中の年記には「乙未(天保六年)六月」と記されているが、蟄居中の身のため公儀を憚つて年記を遡及したのではなからうか。

なお、画を持ち去った鈴木春山は、長崎に留学して蘭方医学を習得した田原藩医で、華山の腹心ともいえる間柄だった。華山の画の買い手を仲介して、困窮した華山一家を援助したと思われる。

七月三日

一、極楽新田(渥美)善四郎、賈人八兵衛持「画幅」来、乞鑑。

善四郎は極楽新田(田原市大久保町)元締の豪農で、時折農産物など



【鷗鷺捉魚図】 出光美術館蔵

を華山宅に差し入れしてきたが、この日は田原城下の骨董商を連れて、持参の画幅の鑑定を求めたようだ。

七月四日

一、鈴木春山^ら、吉田駅商鈴木屋与兵衛、医人完兎男^{かんろうお}浅井^{あさい}（空字）^一来。
中村玄喜、伊東^{（藤）}鳳山来、小酌夜半散、与兵衛贈^二煙花十数枚、茶壺^一。（空字）送^二菓子与兵衛^一。
又貸^三画本二十五枚^一。

鈴木春山は田原藩医でありながら、隣藩の三河吉田にしばしば出かけたが、長逗留したりして、同地に友人知己が多かった。この日は吉田下り町（豊橋市花園町）で味噌醸造業を営む鈴木屋与兵衛と、同じ下り町の町医浅井完兎の息子弁庵を連れて華山宅に來訪した。そこへ田原藩医の中村玄喜や儒学者の伊藤鳳山がやって来て、一緒に酒を少々飲んで夜に解散した。与兵衛は美しい画用紙十数枚と茶壺を贈ってくれたので、その返礼として菓子を渡し、画の手本二十五枚を貸し与えたようだ。

七月六日

一、与兵衛（空字）春山来、持^レ画去。
賈人庄右衛門送^二棘影魚^一来。大一

尺五六寸、直命^二割烹^一、与^二春山^一数人^一小酌。

与兵衛と春山が來宅して、私が描いた画を持ち去った。画の買い手と思われる骨董商の庄右衛門は、その返礼として鯛を持参して來宅した。その鯛の大きさは、一尺五六寸に及ぶものだった。直に調理を命じ、春山ら数人と小宴を開いたという。窮屈な蟄居生活ながら、しばしの慰労と懇談の場を持てたことがわかる。

七夕

一、昨賈人八兵衛、持^二示石川丈山書和顔二大幅^一。真蹟妙品。

石川丈山は三河安城出身で京都に閑居し、詩文・書に通じた文人として有名であるが、その作品がこの地にも出回っていたことと、華山がその真蹟に接して感銘を受けたことが知られる。

同 二十三日

一、游総図着色。

游総図とは、華山の風景画の最高傑作ともいわれる「四州真景図」である。文政八年（一八二五）六月末、三十三歳の華山は、上総・下総・常陸・武蔵の四州へ遊覧の旅に出かけ、

その旅日記に描かれた合計三十枚の淡彩のスケッチ画を収録した。

この旅日記については、故芳賀徹氏の『日本の旅人13 渡辺華山 優しい旅びと』（淡交社、一九七四）に新鮮な筆致で考察されている。同書によれば、その自由で柔らかな速筆の線描には、「省略の効いた筆致



【四州真景図】（部分）

がよび起こす生命感のみずみずしさ、簡素な彩色にたたえられた情趣の深さ」が感じられる。

『守困日歴』の「着色」の記事について、芳賀氏はモノクロの線描画を全面的に着色したのではなく、「若干の図に色を補ったり、犬吠埼海岸の数景で波頭に白い胡粉をほどこしたりした程度のことを意味していたのではないかと私は推測する。図巻全景を通じての簡素な淡彩は、とても旅行から十五年も経たあとに着色されたものとは思えない、臨在感のすがすがしさを示している」と指摘している。

七月二十七日

一、畠村医（広田）見龍来、診^二予病^一、又携^二書画幅^一乞^レ鑑。（藤原）惺窩先生詩草^一、（俵屋）宗達大黒一、為^レ真。六々山人（石川丈山）詩草一、真偽不^レ決、（狩野）探幽、王穉登（明朝の学者）、山水、呂紀（明朝の画家）為^レ偽。

白露（九月）

一、蘆雁大幅、梧（青桐）竹蘭石横卷を描く。

九月二日

一、伊東（藤）鳳山去月御暇被_レ下候処、畠村にて逗留講訳（釈）致今日来ル。蘆雁の絵を持去。

一、丹羽長平、扇子五本持参、画ヲ求、揮洒遣す。

伊藤鳳山は華山の推挙により田原藩校成章館教授を務めていたが、華山の失脚に伴い田原藩を解雇され、畠村（田原市福江町）に仮住まいし、私塾を開いていた。時折学芸についての懇談や画作の販売の仲介のため、華山宅に来訪していた。また、藩の上級武士の丹羽長平が扇子五本を持参して揮毫を求められたので、応じたことも記載されている。

十月十四日

一、為_二緑个_一（画商、遠州見附在住）作_二両鶏図_一。

十月十六日

一、両鶏図成。此日（福田）半香

（華山の画弟、遠州見附在住）緑个、

応_二和田屋_一（広中六太夫、田原本町の豪勢な酒造業者）招_一。

十月十七日

一、半香、緑个去

華山は一家の生計を維持するために、心ならずも画作の販売を画弟子

たちにたびたび依頼せざるを得なかった事情が窺われる。

十月十八日

一、為_二完晁_一作_二加羅哲斯_一。（井上）忠左エ門、茂右エ門氏来。（中村）

半節、春山、定平来。

十月廿日

一、作_二加羅哲斯_一。（井上）半吾、春山、半節来、夜磯氏（神谷磯右衛門）来。庄右エ門、雪吹（伊織）氏

（華山の親戚）来。

前掲の吉田の町医浅井完晁に頼まれて、医学の祖と言われるヒポクラテスの像を描いた。ヒポクラテスは古代ギリシアの医学者・哲学者であるから、身近に見聞できる人物ではない。おそらく長崎経由で入手した



『ヒポクラテス像』九州国立博物館蔵

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

オランダ渡りの石版画や蘭書の銅版挿絵を種本にしたと思われる。

容貌は頭髮と顎鬚を長く伸ばした老年のヒポクラテスを西洋画法にならって力強いタッチで描いているが、着衣の輪郭などは南画の伝統的な画法を踏襲している。西洋画法と東洋画法が渾然と一体化しているとも言えよう。画像の下部に「天保式年六月、以洋本写之、登」と記されていることから、「鷗茲捉魚」と同じく公儀を憚って年紀を遡及したことがわかる。

なお、完晁の息子の弁庵は、田原の蘭方医の鈴木春山に師事しただけでなく、江戸に出て幕府天文方の箕作阮甫に師事して西洋医学を学ん

だ。帰郷後、吉田で種痘を実施し、さらに村上定平に就いて高島流砲術などを学んだりした。

Ⅲ 俳諧と関わる記事

天保二年（一八三一）九月、三十九歳の華山は、相模厚木（神奈川県）方面への旅に出かけた。旅の途中、六世太白堂長谷川孤月の家に立ち寄って紹介状をもらったことが、俳諧好きの町の旦那衆との交際を豊かにした。華山は十年ほど前から一門の歳旦句帳や選集に挿絵や表紙を描いてきた。その実績が、宿泊や宴席の無料サービスなどの好条件をもたらしたのである。華山自身も月並みな俳句で応答することを楽しみにしていた。

その二週間後の上毛桐生（群馬県）への旅においても、俳諧を媒介にした多種多彩な文人との交流の場が設営され、江戸侍の華山に在郷町の流通や文化の新たな胎動を感じさせた。俳諧は徳川日本の庶民の便宜な社交の手段だったのである。

『守困日歴』では七月九日と八月二日の記事に、合計六一首の俳句が、

作者の俳号とともに掲載されている。『諸国人名録』などを参照すると、

作者の住所、経歴の概要が判明する。

同書によれば、その大半は吉田・岡崎をはじめとする三河と、尾張名古屋周辺の俳人であるが、遠隔地の江戸、京都、近江信楽（滋賀県）、安芸広島、讃岐丸亀（香川県）、豊前中津（大分県）などの俳人も含まれている。当時の俳諧仲間は、藩の壁を越えた幅広いネットワークを持っていたことが知られる。いずれも華山と面識のない俳人である。

これらの俳句は、同年八月二五日付けで華山が鈴木与兵衛（俳号は三岳）宛の書簡で、「一、拙画ハ被遣候俳書之中にて、おもしろと存候ものを題に致し認め候共、大きにぞつ書にて不出来有之候」と書いていることから、蟄居中の華山宅をしばしば訪問していた三岳を通じてもたらされた俳書から抜き書きされたものと思われる。田原藩領の俳人は掲載されていないので、吉田城下の俳人の俳句と俳号のみを紹介したい。

蓬宇（佐野権右衛門、萬屋、旅をして好になりけり真桑瓜

蓬宇（佐野権右衛門、萬屋、

吉田本町住）

宵の気□買ひにやりけり冷し瓜

○五月雨や鵬飛んで煤まぶれ

茶の煮へて夜の明かねる野分かな

さし汐に葦のかくれて秋の暮

水竹（福谷藤左衛門、富商、油屋、吉田西町住）

○麦秋や仏間の外ハあげ昼

○蚊のちれりやぬれ手ぬぐいを芝の上

三岳（鈴木与兵衛、味噌醸造業者。岡崎の俳人・鶴田卓池に師事した。また、華山に俳画を学んでい

○印のついた俳句は、華山が秀句に選定した句のようである。

IV 池ノ原幽居の生活と学問・思想

七夕には蟄居中の身ながら、国元藩士やその家族が来賀し、次のように差し入れを届けた。「一、丹羽婦

塘妻来駕、送白砂糖。川澄又次郎女来賀、送西瓜。一、村上作

太夫送梨果桃実。一、以鯖五尾、賀雪吹氏。々々々妻来賀。」

當時は蟄居宅と藩士との往来規制が、まだ緩かったことがわかる。

とはいえ、華山一家の困窮状態は、次のように相変わらずだった。

七月十四日

一、春山憐子窮、以阿堵（金銭）

二兩贈。蓋拙画潤筆、乃託此阿堵雪氏（雪吹伊織）、還生田氏。

一、雪氏又借阿堵三丸送予。

蓋又与春山議云、以之償責未済。

一方、江戸侍の華山には馴染みがたい仕事だったが、「九月七日、庭園中空地を自開墾す」「同八日黄昏、再墾圃」「九月十一日、蚕豆（そらめ）、エンドウ豆蒔く。土コヘ（肥料）ハモク（海藻）也」などと、農業実体験を記している。

華山が画作の次に精励していたのは、儒学などの古典籍を自ら解説すると共に、「七月二日 終日読論語

。午後伊藤鳳山来対読、又（金田）順造、（井上）友三郎、（稻熊）豊五郎、（空字）四少年来聞」のように、国元藩士やその子弟に向学の機運をつくることだった。

他方、華山は幕政批判の罪により、蟄居の身であったが、世捨て人になる事はできなかった。国内外の政治・

経済情勢への関心は相変わらず持ち続けていたのである。例えば、七月二八日の記事から江戸巢鴨の三宅友信から借りたオランダ風説書に目を通していた形跡が窺われる。

また、江戸からの便りに基づく九月二日の記事には、東北から関東の物産のできばえや、米・塩・油・絹・綿などの価格の変動が、リアルに書き留められている。

さらに九月二十三日の記事に、「春山来云う、伊斯勃爾任（スペイン）孤説云、人生固有之、智唯知幅員（福音か）、一、時運而推之耳、蓋其意指宇宙歟」とあることから、蘭学者・鈴木春山の語る西洋人独特の人生観、宇宙観、キリスト教思想などの言説に、華山は相変らず関心を持ち続けていたことがわかる。

一度は断念した洋学を想起し、ハ冬の収穫ともいえる画作を目指していた華山の蟄居生活が暗転し、絶体絶命の心境に追い込まれるのは、残された華山書簡などによれば、翌年五月頃からである。

9

研究会員 中神昌秀

渡辺崋山は、文政八年（一八二五）、数え三三の歳、利根川下流域を旅しスケッチ画入り紀行文『四州真景図』（重要文化財 個人蔵）を制作します。この旅では江戸麹町隼町に住む俳人の小林蓮堂（れんどう）を旅の友に、利根川河口まで行き、銚子の富豪大里庄治郎（一七八三―一八四五）の屋敷に滞在します。

大里家は、陸奥国（福島県）の磐城平藩安藤家（六万七千石）と棚倉藩井上家（六万石）の御穀宿（ごこくやど）になっていました。御穀宿という名称についてですが、東北地方から江戸方面へ年貢米や買米（収益目的で買い上げた余剰米）を海上輸送するための弁才船（べざいせん 一枚帆の大型和船）を御穀船と言いましたが、その船宿というか、停泊拠点という意味合いがあります。実際には御穀宿とは、東北諸藩又は幕府の廻米（遠隔地へ廻送する年貢米等）を取扱う商人を意味し、その機能は多岐に及びました。大里家の六代目が行方屋（なめかたや）大里庄治郎富文です。

した俳人でもありました。桂丸は、江戸後期の俳句の宗匠で佐原（千葉県香取市）在住の今泉恒丸（一七五一～一八一〇）の門人です。

華山は『四州真景図』によれば「文政八年乙酉歳六月廿九日曇、卯刻出宅。」とあり、旧暦文政八年六月二十九日、新暦八月一三日に、江戸を出発し、「四州真景」の旅に出ます。初日は白井宿（千葉県白井市）の藤屋八右衛門、二日目は津宮（千葉県香取市）の佐原屋、三日目は潮来（茨城県潮来市）のいつみや泉助に宿泊し、銚子まで旅を続けます。銚子到着の日は、明確ではありませんが、潮来から銚子へは利根川を下り、一日あれば十分なので、新暦八月一六日には銚子へ到着したと推測されます。なお、華山が銚子の大里邸を出て江戸戻る日については、『四州真景図』に記載はありません。

『刀祿河游記』は二つのものがあります。一つは、大里家に伝わり、空襲で焼失した正本とも言うべきものです。もう一つは、稿本と言われ

七九刀 福游記 卷
紙本 淡彩
鑄子 大里庄次郎氏藏
堅九寸七分

[illegible][illegible]

ているもので、コロタイプ印刷版です。ただ、

その原本は所在不明です。昭和一六年（一九四一）発行の『渡辺華山先生錦心図譜』に掲載された『刀祢游記』の書き下し文の前に、七行の解説があります。その中には稿本について「尚ほ此の外に世に出た別の一巻があるが、圖中處々に損傷の跡が見えている」と書かれています。

正本と稿本の二つの刀祢河游記の存在について渡辺華山集第1巻『刀祢河游記』には以下のように書かれています。「『刀祢河游記』は二本が存在する。大正九年（一九二〇）一〇月に『芸苑叢書第三輯』として林縫之助が発行した複製折本は、『華山翁刀祢游記』の標題が付いている。この原本は所在不明である。もう一本は、桂磨の子孫である大里家に伝えられたもので『錦心図譜上巻』では『刀祢河游記卷』として写真版を添えて翻刻されている。大里本は太平洋戦争の銚子空襲で焼失している。」

文星芸術大学名誉学長の上野憲示氏は、「これは游行中に華山が巻紙に即写即吟で記したもので、乱雑な所があり、これを稿本として改めて清書して大里氏へ贈ったのが大里本である。稿本の方は何時か華山の家から離れ、巷間に出たが、草稿で前の部分が破損している。然し書体筆法は一茶に刺激され、それに若干似た華山の筆法であって下書きではあるが、決して偽物ではない」と述べています。

四 『刀祢河游記』のすぎし游

『刀祢河游記』で最も特徴的な点の一つは、ストーリーとその構成というか舞台設定です。『刀祢河游記』は大里の華山に対する歓待をテーマとしたものですが、それは利根川河口に舟を漕ぎ出し、大里から受けた現実の歓待の様子を表面的に描写しただけのものではありません。

『刀祢河游記』の文末に書かれた、「すぎし游を思い出し」とは、「すぎし知の游」とも言うべき、エスプリに富んだ会話、それは多分、大里が主導し、蓮堂、華山がそれに呼応する形で進行了たであろう会話を思い出し、懐かしむと言うことなのです。また、この文章の特徴のいくつかは。物語の舞台設定を構成するパーツでもあります。

そして、華山、大里、蓮堂の三人が共有した時間と空間が、まるで今ここに存在するように、リアリティ豊かに再現する舞台として華山が考えたのが、華山と大里、蓮堂が、現実と仮想空間が交差する舞台で繰り広げる白昼夢のような不思議な物語でした。

五 ストーリーと舞台設定、すぎし知の游

特徴として、ストーリーと舞台設定を挙げましたが、もう少し詳しく説明をします。『刀祢河

游記』は、いきなり風流な書き出しから始まり、続いて難解な絵画論が展開されていきます。冒頭から数行目に「人のいり来て、いかにぞやといふ」という文章が出てきます。そもそも華山は大里の屋敷に滞在しているはずなのに、来客がどなたの屋敷ですかと尋ねて来ると言う不思議な設定です。風流な表現で多少幻惑された所へ、平易な言い回ししながら意味不明な問いかけがあり、次に「予が海上に遊べるを」と続きますが、大里は海上郡に居住しており、遊びにきたのではありません。どんどん「現実と仮想空間が交差する白日夢」は深みに入っていきます。そして、話は蓮堂の屋敷の訪問へ続きます。蓮堂は江戸に住み、銚子に屋敷などあるはずはありませんが、そこは、無視して読み進めます。

次に大里、華山、蓮堂の三人で、月夜の戸を閉ざした銚子のまちを、すぎ人やあるかとたづね歩き、利根川に至ります。そして、旧盆の月明りの利根川へ、まるで夢の中へ入って行くように、艫綱を解き舟を出します。

船上では。地名の解説と伴に、地名にちなむ和歌の引用や、比喻を取り入れた地形の説明が続き、佳境へと至ります。文末は格調高い、漢詩調の文章を取り入れて終わります。この一連のストーリーこそが、すぎし知の游とも言えるべきもののなのです。

「偉人物語 渡辺華山」

読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「偉人物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、二三八点の応募をいただき、

最終選考において選ばれた二七点の中から最優

秀賞一点と優秀賞五点の作品をご紹介します。

いただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



最優秀賞

自分の信念を貫く勇氣

田原市立田原東部小学校 六年 西村 琉希

僕は、渡辺華山という人を初めて知った時「昔の絵を描く人なんだな」としか思いませんでした。でも、詳しく調べていくうちに、絵だけではなく、学問や政治にも力を入れていたすごい人だということとが分かってきました。そして、今の僕達の生活にもつながるような大切なことを、たくさん教えてくれていると気が付きました。

渡辺華山は、江戸時代の終わりに生きていた人です。武士だったのに、絵を描くことがとても上手で、「文武両道」の人だったそうです。しかも、ただ絵を描くだけではなく、外国のことも熱心に学びました。そのころの日本は、外国とあまり交流せず、難しい話をする、すぐに悪いことと考えられてしまう時代でした。

でも、華山は、外国の学問や考え方を日本に取り入れるべきだと考えていました。特に、外国の武器や船、学問などを学ばなければ、日本はいつか外国に負けてしまうかもしれないと思っていました。それは、今で言えば「日本の未来のことを考えて行動した」と言えると思います。

しかし、そういった考えをしたことで、華山は幕府からとがめられてしまいます。外国のことを学ぶのは、悪いことだとされ、とうとう牢屋に入れられてしまいました。そして最後には、自分の命を絶つてしまう悲しい人生の終わりを迎えました。

僕は、このことを知って、とてもおどろきました。

正しいことを考えて行動したのに、なぜそんなにひどい目にあってしまったんだろうと不思議でいっぱいでした。でも、同時に華山が自分の考えを信じて、あきらめずに、行動したことに感心しました。

今の日本は、自分の意見を自由に言うことができます。もし、華山が今の時代にいたら現代の社会の問題や環境問題に対しても、自分の思いを強く発信していたのではないかと考えます。僕も彼のように、自分が大切に思うことに対して勇氣を持って行動し、周囲に良い影響を与えられる人になりたいです。自由に意見を言える現代に生きているからこそ、その権利を大切にし、自分の考えをしっかり持つことが必要だと感じました。

このように、渡辺華山から学んだことは、自分の考えを伝えることが困難な時代でも自分の信念を貫く勇氣です。僕は彼の姿勢を見習い、自分の考えに自信を持ちながら、周囲の小さなことにも気を配ることを心がけていきたいと思っています。そうすることで、自分自身も周りの人も大切にできる人間になりたいです。

優秀賞

「偉人物語 渡辺華山」を読んで

田原市立中山小学校 六年 濱田 倖心

私は、この「偉人物語渡辺華山」という本を読むまで、渡辺華山という人のことをあまり知りませんでした。学校でこの本をもらい、家で読み始めてみ

ると、とても読みやすく、引き込まれて、夢中になって読んでいました。この本には、華山先生がどんな人柄で、どんなことをした人なのか、とてもくわしく書かれていました。そして、「華山先生は本当にすごい人で、とてもすばらしい人」なのだということを知りました。この本に出会えたことに感謝しています。

華山先生が田原で最後の数年間を過ごしたというところを知り、私が小さい頃に母と姉と三人で行った池ノ原公園を思い出しました。その時の私はまだ小さな子どもで、何も分からず、きおくがあいまいだったので、この夏休みに母にもう一度連れて行ってもらいました。入口には「華山先生玉碎之址」の碑と、華山先生が自筆墓表として残した「不忠不孝渡邊登」と刻まれた碑がとなり合わせにありました。とても静かな園内には、華山先生の屋敷跡や銅像、「誕生」「立志」「報民倉」「蚕社の獄」と記された華山先生の軌跡がわかる碑もありました。この場所では華山先生が最後の時をむかえたということを感じながら、じっくり見て回っているうちに、華山先生がどんな気持ちで自刃という選択をしたのかと考えると、胸が熱くなつて涙が出そうでした。

華山先生は、自分のことよりも人のことを第一に考える心優しい人でした。そして、たゆまぬ努力で勉強を続け、先を見通す力を持っていた人だと思えます。華山先生が田原藩のためにたくさんしたことをした中で、一番心に残ったのは「報民倉」を建てたことです。今ではこの考えは災害の備えとして常識ですが、田原藩が苦しかった時代に、誰も考えたことのないことを考え出し、殿様に提案するのは勇気のいることだと思います。殿様は、すぐに提案を受け入れてくれたということで、華山先生がどれだけ信頼され、すばらしい人なのかわかりました。華

山先生は自分の絵を売って、米十俵を倉に寄付しました。そして、その翌年には天保の飢饉が起きました。その時にも華山先生は「凶荒心得書」というものを書いていました。飢饉の時に殿様や役人はどうすべきかの心構えと対策が細かく、具体的に書かれていたそうです。その中には、「農民があるからこそ殿様があるので、殿様があるから農民があるのでありません」とあり、そう考えて殿様に言える華山先生は、本当に心の強い人だと尊敬しました。「報民倉」と「凶荒心得書」のおかげで、田原藩では飢え死にする人を一人も出さなかったそうです。本当にすばらしいことだと思います。

華山先生の残した言葉として「八勿の訓戒」の教えも私の心にひびきました。今すぐに全てを実行するのは難しいけれど、華山先生から学んだ思いやりの心、あきらめない心、行動に移す力を、これからの自分の学校生活に生かしていけるようになりたいと思います。

渡辺華山の生き方から学んだこと

田原市立田原中部小学校 六年 藤井 柚帆

渡辺華山は、自分がぎせいになつてでも、地域の人や家族のために働くことができるすばらしい人です。私は地域の人や家族のために力いっぱい働こうと思つていても、なかなかそれを上手く実践することができません。相手のために何かしてあげたいと思つても、自分のことに精一杯になり、上手くできません。明日こそはと思つても、なかなかできていませんでした。しかし渡辺華山は、地域の人や家族のために報民倉を作つて、何かあった時に備えて、準備をしていました。だから天保七年に起きた

風水害で農作物に大きな被害が出た時には、渡辺華山が建てた報民倉がとても役に立ちました。おかげで田原藩は一人も餓死者がいませんでした。もし、渡辺華山が報民倉に米を備えていなかったら、多くの人々が亡くなつていたでしょう。渡辺華山は、田原藩の人々にとって、命の恩人だと思います。そのおかげで今の私たちが存在すると思えました。

渡辺華山が作った俳句に、
「見よや春 大地も亭す 地虫さへ」

というものがあつて、小さな虫でも春が来れば固い大地を突き抜くように、努力し続ければ希望が叶う日が必ずくるはずだ、という意味だそうです。苦しいことがあつても、努力を積み重ねていけば、世の中を変えられるほどの力となる日がいつか来るかもしれないと思えました。私も今がんばっていることがあつて、それは漢字ノートに一日一ページ練習することと、自主勉強をすることです。つかれてやりたくない時もありますが、毎日こつこつと続けることに意味があると思うので、家に帰ると他のことよりも優先して取り組んでいます。私の努力は、渡辺華山と比べたらとても小さなことかもしれませんが、でも、毎日続けることで自分を成長させることができるのだと信じてがんばっています。そして、いつか渡辺華山のように、大きなことを成しとげられる人になりたいです。

渡辺華山は、努力家というだけではなく、とても正義感にあふれた人だったようです。そのせいで周りからきらわれたこともあつたようですが、自分の信念をつらぬくことができるとても強い人だと思えました。私はすぐ周りに流されたり、きらわれたくなくて人に合わせてしまつたりすることがあります。しかし、これからは渡辺華山のように、信念をもって毎日を過ごしたいと思いました。

渡辺華山の生き方から学んだことはたくさんありました。一人でも多くの人に渡辺華山の生き方を知ってもらえるように、語り続けていくことが大切だと思います。そして、今を生きる私たち一人一人の行動で未来が変わると信じて、これからも自分ができることを精一杯がんばっていきます。

渡辺華山の生き方

田原市立中山小学校 六年 荒木 凰羽

ぼくは、この本を読んで、渡辺華山という人がとても立派で、強い心を持った人物だということを知りました。渡辺華山は江戸時代の武士であり、すぐれた画家でもありました。子どものころは貧しく、生活がとても苦しかったそうです。しかし、華山には絵の才能があり、その絵を売って家計を助けました。さらに、大人になってからは、藩の家老という役目を持ち、藩のためにも絵を描いて売り、そのお金で藩の財政を支えたそうです。自分の得意なことを使って人の役に立つ姿は、とてもかっこいいと思いました。

ぼくが特に心に残ったのは、華山が絵を描き、それを売って藩を助けたということです。普通なら、家老という仕事だけでも忙しいはずなのに、華山はそれに加えて絵を描き続けました。自分の得意なことをあきらめずに、それを誰かのために役立てる。その努力と優しさには、感動しました。

しかし、華山の人生は最後に悲しい結末を迎えます。幕府の考え方と違う意見を持っていたことで罪に問われ、「蛭社の獄」という事件に巻き込まれてしまいました。そのとき、華山は殿様や家族に迷惑をかけたくないという思いから、自ら命を絶ちまし

た。自分の命よりも周りの人のことを思って行動した華山の心の広さと覚悟は、簡単にまねできるものではありません。

この本を読んで、人助けをするということはとてもすばらしいことだと改めて思いました。そして、ぼくも誰かの助けになるようなことをしたいと強く感じました。ぼくはこれまでに、児童会の活動や学級委員として、みんなの役に立てるように取り組んできました。たとえば、行事の準備や後片付けを率先してやったり、クラス全体が楽しく学校生活を送れるように意見を出したりしました。ときには大変なこともありましたが終わったあとにありがたうと言われたり、みんなが楽しそうにしている様子を見ると、とても清々しい気持ちになりました。

華山の生き方を知って、ぼくはこれからも人の役に立つことを続けたいと思いました。学校の中だけではなく、地域や社会の中でも、自分ができることを見つけて行動していきたいです。そして将来人を助けたり、楽しませたりする仕事につきたいです。どんな形であつても、人のためになることをして、自分も誇れるような生き方をしたいです。

渡辺華山の生き方から、周りの人のことをよく考えて行動する大切さと、人と接するときの優しさの大切さを学びました。ぼくも学校や家庭、地域の中で、友達や家族、仲間の気持ちを考えて行動し、困っている人の力になれるような人になりたいです。そして将来は、自分の得意なことや、自分の今までの経験を生かしながら人の役に立ち、他人への感謝の気持ちも大切に出来る生き方をしていきたいです。そうなれるように、これからも努力を続けたいです。

挑戦し続けた渡辺華山

田原市立高松小学校 六年 辻 桃花

私は、「渡辺華山」という人についての本を読みました。渡辺華山は、江戸時代の末、日本が大きく変化する時期に活やくした絵師、そして学者、時には政治にも関わった田原のい人です。自分の考えを信じ、時代の変化を感じ取りながら生きた彼の生き方がとてもおもしろかったです。

まず、渡辺華山は、絵が上手だったことで知られています。当時の普通の絵師とは違い彼は西洋の技法を学んで、それを自分の絵に取り入れました。今までの日本の絵師とは少し違う、新しい絵を描きました。ここから華山は、もっと新しいことを取り入れていこうという気持ちが強かったと感じました。

また、華山は、絵を描くだけでなく、学問にもすごく興味を持っていたそうです。特にオランダの学問、蘭学や西洋の学問を学び、それを日本に広めようと思いました。その知識を使って、これからの日本をどう変えていくかを考え続けました。当時、華山のように新しい学問を取り入れようとした人は少なかったのですが、私は、すごく勇気がある人だなと思いました。

しかし、華山の考え方は、当時の権力者たちに受け入れられませんでした。華山は、もっと自由で平等な社会にしたかったのですが、当時の政府、幕府はそんな考えをよく思わなかったのです。華山は改革を進めようとしても、どんどん追いつめられてしまいました。最終的には、汚くて衛生面の悪いろう屋にいれられてしまい、その後、ろう屋から出されたものの、武士らしく切腹し、自らのどへ止めをさして、四十九才で命を落としました。これは、本当

に悲しいできごとだと思いました。

本を読んで、私は、どうして渡辺華山がここまで改革を進めようとしたのか考えてみました。彼は、もつとよい日本にしたいという強い思いを持っていたのだと思います。しかし、その考え方は、当時は全くちがっていたので、受け入れられませんでした。そして、悲しい最期になってしまいました。もし、彼がもつと長生きしていれば、もつと日本を変えることができたのではないかと思います。それでも、華山の考えや行動は、後の時代に大きな影響を与えました。彼が学んだ西洋の学問、絵の技法は、後に日本が近代化をしていく中で重要な役割を果たしました。だから、華山がどれだけすごい人だったかを改めて感じることができました。

私は、自分の未来についてはよく考えるけど、日本の未来についてはあまり考えたことがありませんでした。今のままでいい、今の生活が普通と感じてしまふけれど、華山のように新しいことに挑戦する強い心を持ちたいと思いました。もし華山が「今は無理だ」とあきらめていたら、この日本は、もつともつと遅れていたかもしれません。だから私も、自分が今できることをしつかり考えて行動しようと思いました。

まっすぐに生きる

田原市立泉小学校 六年 中村 碧 来

渡辺華山先生の紙芝居や本を読み、その生き方に心をうたれました。名前だけは聞いたことがあったけれど、こんなにも強く、深く、人のために生きた人だったとは思いませんでした。

華山先生は、江戸時代の田原藩の家老で、絵の才

能があり、外国の学問にも興味をもっていました。でも、子どもの頃はとても貧しかったようです。弟たちが寺や他の家に出されてしまった時、声も出ないほど悲しかったという話を読んで、胸がしめつけられました。そのような状況でも、努力を続け、かまどの火で本を読み、紙がなくても工夫して絵を描き続けた姿に、強い意志と希望を感じました。

一番衝撃を受けたのは、「蚕社の獄」の場面です。悪いことをしていないのに、正しいことを考え、学び、伝えようとしていただけで、七か月も牢屋に入れられてしまいました。その時に、皮膚病になり、おなかもちわし、体も心もボロボロになっていたのです。寒さの中、弱った体で田原に運ばれ、途中で気を失ったという話は、まるで命をけずられているようで、読んでいて息がつまるほど苦しくなりました。こんな理不尽なことがあるのかと、怒りと悲しみがこみ上げました。田原に来てからは、絵を描き続けながら、家族と暮らしたそうです。罪人としての生活は、どれほど苦しかったかと思うと、町奉行の人たちにはもつと人の心を考えてほしかったです。

心に残ったことは、「報民倉」というお米の蔵を作った話です。「百姓があるから殿様がある」という考え方に、民を大切にする気持ちが表れていて、素晴らしい人だと思いました。私の親戚の家にも蔵があります。小さい頃、家族で遊びに行っていた時にその蔵を見て、どうしてこんなに大きいのかと不思議に思いました。室内は、空気がひんやりしていて、光も少なく、入った瞬間に目の前が暗くなるような感じがして、その薄暗さと静けさが怖くて、長くいられませんでした。母に「悪いことをすると蔵に閉じ込められたことがあるよ。」と教えてもらいました。今では使われていないその

蔵も、昔の人の暮らしや想いがつまっているように感じ、大切な場所に思えました。

華山先生は、田原市の誇りだと思っています。こんな立派な人が自分の市にいたことを、もつと多くの人に知ってほしいです。また、田原城跡や博物館にも行って、もつと華山先生のことを知りたいと思いました。田原にこんな人がいたことを知り、田原のことがもつと好きになりました。

これからつらいことがあっても、華山先生のように、人の苦しみを自分のことのように思い、どんなことにも負けず、自分の信じる道をまっすぐ進める強い人になりたいです。自分なりに一日を大切に生きて、力いっぱいがんばって生きていきたいです。

入 選

鈴木 稟 乃	渡 邊 空 知	高 橋 篤 希
富 田 椿	平 田 莉 未	澤 谷 真 穂
本田隆之佑	三 星 歩 瑠	山 本 葉 名
武 仲 悠	鳥 居 葵 加	宮 川 英 大
仲 神 里 胡	野 々 菜 花	宮 本 祐 希
加 藤 蒼 汰	山 本 優 亜 菜	宮 本 愛 恵 里
北 崎 海 成	高 瀬 葵	他 1 名

(受賞された方は除く)

田原市博物館展覧会のご案内

企画展

渥美半島の貝塚展

十月四日(土)～十一月三十日(日)

豊かな自然に育まれた渥美半島には古くから人が住み、縄文時代の貝塚が分布しています。渥美半島の貝塚は明治時代から調査が行われ、縄文時代後期末から晩期の国史跡吉胡貝塚、県史跡伊川津貝塚、市史跡保美貝塚は渥美の三大貝塚として知られています。これらの貝塚は人類学者、考古学者が調査を行い、出土した遺物、大量に出土した縄文人骨



縄文時代 保美貝塚風景復元図

は日本の人類学・考古学の発展に大きく貢献し、縄文時代を代表する遺跡として長く知られてきました。今回の展覧会では、過去の調査資料が百年ぶりに里帰りするほか、最新の調査・研究によって得られた資料が展示されます。

【企画展イベント】

詳細はホームページをご覧ください。

（特別展示室）

【企画展同時開催】旅する絵画

「旅」は新たな文化に出会えたり、非日常を体験できたりします。江戸時代になると、文人画家たちも旅に出て、旅先で見た風景や古画などを描きました。また理想の風景を構築し、絵の世界を旅するような作品も描かれました。本展では、江戸時代に描かれた風景画を中心に、実際に旅する気持ちでお楽しみください。

十二月六日(土)～令和八年一月八日(日)

（特別展示室）

華椿系画家たちのハンコ

現代ではペーパーレス化が進み、ハンコを捺す機会が少なくなってきました。江戸時代以降は絵画や書の落款とともにハンコが捺され、その作者であることを示していました。本展では、華椿系画家が使用したハンコや絵画、書などに捺されたハンコに注目します。



田原市指定文化財
椿椿山印類

渡辺華山の生涯と作品

常設展示室では、渡辺華山の生涯を常時紹介しています。

また、特別展示室では、華山やその師友、弟子等の作品を随時入替えながら展示しています。

観覧料

企画展開催時

渥美半島の貝塚展・旅する絵画

一般 七〇〇円(五六〇円)

小中生 三五〇円(二八〇円)

その他

一般 三〇〇円(二四〇円)

小中生 一五〇円(一二〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金

東三河在住の小中学生は、ほの国

こどもパスポート提示で無料。

休館日 毎週月曜日(祝日の場合はその翌平日)、展示替日、年末年始(十二月二十八日～一月四日)

(公財)華山会から

講座「渡辺華山を知るために」

毎月十一日午前九時から

華山・史学研究會會員募集中

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

渡辺華山史学巡りガイド養成講座

毎月一回程度

申込場所 華山会館事務室

華山会報 第五十五号

令和七年十一月十一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 林 勇夫

常務理事 讃岐俊宣

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江一二の一

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究會

会長 鈴木利昌

※華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 令和八年四月十一日